笠地蔵（かさじぞう）　山形県

むかし、ある村に、おじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは、毎日、山へ木を切りに行き、それを町で売って、米を買ってきてくらしていました。

ある雨の日のことです。おじいさんは、木を売りに町へ行きました。雨がひどくふっていましたが、木を売らないとご飯を食べられないので、たくさんの木を山のように背負って出かけていきました。

村はずれまで来ると、六地蔵さまが、雨の中で笠もかぶらないで、びしょびしょにぬれて立っていました。おじいさんは、

「お地蔵さま、お地蔵さま。帰りに編（あ）み笠を買ってきてかぶせてあげましょう。どうぞ待っていてください」といって、町へ行きました。

町に着くと、おじいさんは、

「山から来た木売りのじいでごさい。木はいらんかな」といって歩きました。木はたちまち売れました。そのお金をぜんぶ出して、大急ぎで編み笠を買いました。そして、わらわらと山へもどっていきました。

六地蔵さまは、雨の中でびしょびしょにぬれて、まるで水に落ちたようになって立っていました。おじいさんは、気のどくがって、

「お地蔵さま、お地蔵さま。こんなにぬれて、さぞ冷たかろう。早く笠をかぶってください」といって、買ってきた編み笠をひとつひとつ、お地蔵さまにかぶせていきました。ところが、編み笠は五つしか買えなかったので、ひとつたりませんでした。おじいさんは、

「お地蔵さま、お地蔵さま。ほかには何もないので、おれのふんどしをかぶってください」といって、自分のふんどしをはずして、最後のお地蔵さまの頭にぺろっとかぶせました。それから、おばあさんの待つ家へ帰っていきました。

「おばあさん、おばあさん。今帰った」

おばあさんは、

「おじいさん、きょうは、木がぜんぶ売れたみたいですね。よかった、よかった」といいました。おじいさんは、

「だが、きょうは、お金が一文ものこらなかった。じつはな、村はずれまで行くと、六

地蔵さまが、雨の中で、笠もかぶらないで、ぬれて立っておられたから、編み笠を買ってきてかぶせると約束したんだ。だから、木を売ったお金は、ぜんぶ笠代（だい）にしてしまって、米は買えなかった」といいました。おばあさんは、

「それはよかった。わたしらはお湯を飲んで寝ればいい。いちどくらいご飯をぬいても、なんでもありませんよ」といいました。おじいさんは、

「おばあさん。お金をぜんぶ使っても、笠は五つしか買えなかった。それで、一体のお地蔵さまには、おれのふんどしをかぶせてきたんだ。ふんどしなどかぶせて、ばちが当たらないかなあ」といいました。ふたりは、心配でしたが、夜になったので、お湯を飲んで、早くにふとんに入りました。

　その夜中、ふたりは、何かの音で目が覚めました。

「おばあさん、おばあさん。外のほうでずいぶんにぎやかな音がするが、いったいなんだろう。何だか、こっちに来るようだ」

あんまり大きな音がするので、おじいさんとおばあさんは、起きだしてそっと外を見ました。すると、ふんどしをかぶったお地蔵さまを先頭にして、六地蔵さまがやって来るのが見えました。おじいさんは、

（おれが、ふんどしをかぶせたから、お地蔵さまがおこって、うちに来たんだろうか）

と思いました。そのとき、六地蔵さまが歌う歌が聞こえました。

雨のふるとき　編み笠買ってかんぶせた
じいが家はどこだべな
ばんばの家はどこだべな
えいこらさあのしゃあ

おじいさんとおばあさんは、あおくなりました。

雨のふるとき　編み笠買ってかんぶせた
じいが家はどこだべな
ばんばの家はどこだべな
えいこらさあのしゃあ

お地蔵さまたちはどんどん近づいてきます。ふたりは、ばちが当たってもしかたがないと思って、

「おれの家は、ここだ。六地蔵さま、おれの家はここだ」といって、戸口から顔を出しました。ふんどしをかぶったお地蔵さまは、

「そうだ、そうだ。このおじいさんだ。みんな、ここだぞ」といって、戸をがらりと開けました。そして、入口に、車に積んできたお金のふくろやら、布やら、もちやらを、みんなでじゃらんじゃらんと下ろしました。そして、

「さっきは、ほんとうにありがたかった。これをやるから、ふたりで楽にくらせ」といって、もどっていきました。おじいさんは、びっくりして、

「こんなにりっぱな宝物をもらった。明日からは木を切りに行かなくてもいい」と、大喜びしました。それからは、ふたりで楽にくらしたということです。

とんぴすかんこ　ねっけど。

村上郁再話

資料『萩野才兵衛昔話集』野村純一／瑞木書房